

自分が打つその音に惹かれて、
鼓という楽器に惚れたんです。

「ねおんの視点」

藤舎呂英

藤舎流囃子方／鼓奏者

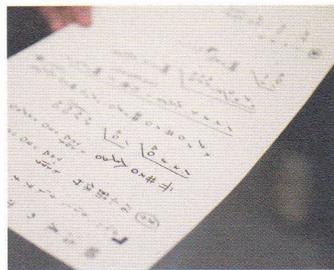
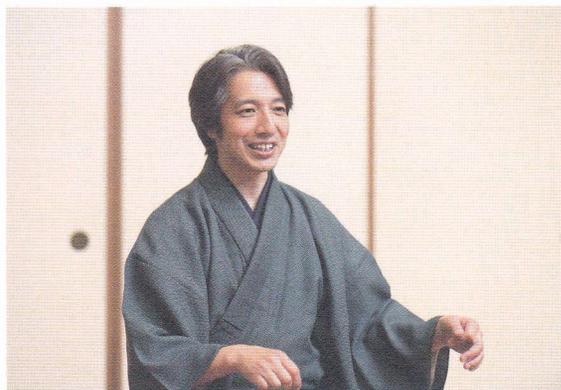


プロフィール

藤舎呂英(とうしゃるゑい)

祖父・望月太津市郎、父・藤舎呂浩と代々囃子方の家系に生まれ、宗家藤舎せい子、六世家元藤舎呂船に師事。囃子方の職分である小鼓、大鼓、太鼓といった楽器全般に才能を発揮し、国内外で活躍。特に小鼓の技量に高い評価を得ている。

「空から謡が降ってくる」といわれる街、金沢。謡とは能楽における声楽のこと。この言葉は瓦職人や植木職人が仕事の合間に謡う様子を表したもので、武家や商家だけでなく、庶民にまで能が親しまれていたことを物語っています。そして、すっかり金沢駅のシンボルとなった鼓門。その威風堂々とした佇まいは、観光客は



もちろん、地元の人たちからも広く親しまれています。

そんな芸事や邦楽になじみ深い金沢の子どもたちに伝統芸能を継承するため、月に二回、『石川県立音楽堂』で、鼓や太鼓を指導するのが藤舎流囃子方の藤舎呂英さん。古典曲の囃子にとどまらず、新曲の作調（リズムセクション）を作曲すること）や、創作囃子の作曲などにも才能を開花させ、多方面で活躍する日本屈指の囃子方です。

祖父・父ともに囃子方の家に生まれ、祖母は三味線奏者でもあった呂英さん。幼い頃から英才教育を受けてきたのかと思いきや、本格的に取り組み始めたのは意外と遅く高校二年生の頃。進路について考え、漠然と鼓を手にして打つてみたところ心地のいい音が響いた。身体が大きくなったことで可能になった、幼い頃に鳴らしたものとまったく異なるその音に魅せられ、「鼓に惚れた」のとか。以来、心を決めてから、今までの遅れを取り戻すように稽古に没頭。思うように鳴らせない難しさが、逆に面白さとなり、鳴らせるようになる楽しさと、その音色にどんどん魅せられていったといいます。

実際、その場で奏でられる鼓や太

子どもたちに邦楽に親しんでもらい、伝統芸能を継承することを目的とした「いしかわ子ども邦楽アンサンブル」にて、『石川県立音楽堂』で月に2回、鼓や太鼓の指導を行う。



鼓の生の音を聞くと、その抑揚の効いた表現力に驚かされます。

「上手い奏者っていうのは楽器が歌うような感じになるんです。鼓でもそうなんですけど、打っていても、歌うように打っているんですね」

「タ・チ・ブ・ポ」で表現される四種の音を無段階に調整し、また、強弱をつけることで歌っているかのように思わせる。シンプルだからこそ奥深い。ただリズムを刻むだけでなく、表情豊かな音色によって、舞台を一変させ、聞いている人たちを唸らせる。それが、鼓や太鼓など、和の打楽器の特長といえるかもしれません。

そんな鼓や太鼓の魅力を伝える

べく、呂英さんが目指しているのは自らの演奏で「鼓奏者」という存在を定着させること。邦楽奏者と呼ばれることはあっても「鼓奏者」とはなかなか呼ばれない。ピアニストやバイオリストと同じように、鼓のソロで演奏会を行い、鼓を演奏する一人の音楽家としての可能性を追求していきたいという思いがあるそうです。

「日本人って意外と日本のものを知らないもの。色んな人の前で打って、鼓の魅力を一人でも多くの人たちに知ってもらいたいですね」

歌舞伎や能を観たことはあっても、鼓の演奏会に行ったことのある人は、少ないのではないのでしょうか。鼓を力強く「ポン」と打った後の無音の空間。激しい乱打による、なんともいえない高揚感。そして、「ヨー」という掛け声とともに会場全体が静寂に包まれる、息をのむような緊張感。人間の声と間と楽器が織りなす、洋楽では決して表現できない鼓の世界は、まさしく背筋がぞくぞくするような体験となり、私たちが日本人であることを、改めて思い起こさせてくれるに違いありません。

機会があればぜひ一度、足を運んでみてはいかがでしょうか。そこに新たな発見と驚きがあるはずですよ。